

PATO
岩手

協議会

No49号

事務局

〒029-4503

金ヶ崎町西根真析

152

日本スキーパトロール協議会岩手県支部

http://www.geocities.jp/patokyoku_iwate/

寄稿 震災とスキーと私

遠野市スキー協会（坪井 忠和）

【岩手県スキー連盟教育本部技術員】

【東日本大震災】

私の自宅は遠野市にあり、そこから毎日勤務先である釜石の県立病院に通動している。

2011年3月11日東日本大震災の当日は、午後から休みの予定であったが、年度末も近く職場で残務に追われていた。14時46分、今まで経験したことのない大きな揺れが病院を襲った。岩手県立釜石病院は以前の耐震診断の結果、大きな地震で倒壊のおそれがあると言われていて、病院は倒壊こそしなかったが大きなダメージを受け、急性期病院としての機能が大幅に低下した状況で医療の継続が余儀なくされた。

私は病院で救急外来を担当しており、加えて日本DMAT隊員（災害に特化した医療チーム）に所属していたため、災害対策本部の一員として災害対応にあたることとなり、約2ヵ月間病院に寝泊りをし、自宅のベッドで休むことができたのは、ゴールデンウィークを過ぎてからであった。

【スキーヤーのボランティア活動】

被災地内の急性期病院で、毎日少ない休息時間で医療活動を続け疲れもピークとなってきたころ、竹鼻建さんの新聞記事が目に入った。被災者に対しスキーウエアを配っているという内容の記事だった。この記事に私はとても感動し勇気を与えられた。仲間のスキーヤーがこの近くで被災者のために一生懸命活動している、このことは私の中で大きな支えとなった。すぐにメールで竹鼻さんと連絡をとった。竹鼻さんは、被災者の求めているものは、自分たちが援助できることは何か等々情報を集め、この危機に被災地のためにできることを、早い時期に迅速に対応し活動してくれたい。病院を訪れる患者のなかに、スキーウエア姿で来る人を見かけると、竹鼻さんの顔が思い浮かんだものであった。

【明日のスキーのために】

震災から数ヶ月たった頃、竹鼻さんから「被災地の子供たちに我々スキーヤーとして



何かしてあげられる事はないだろうか？」と連絡が入った。いろいろな案の中で、インラインスキーで遊んでもらう企画を、大船渡のスポーツ少年団や、釜石、陸前高田在住の小学生スキーヤーに提案した。

8月の暑い日であった、遠野市の柏木平レクリエーションで、竹鼻さん、海野さんらが講師となり、遠野市スキー協会の協力のもとで、被災地の子供達に遊ぶ場を提供することができた。菊池隆教育本部長をはじめ、大船渡の白崎さん、千葉さんをはじめ県内からたくさんの方々が集まり、子供達と遊び遠野名物のジンギスカンをお腹いっぱい食べてもらった。子供達の笑顔、歓声を見て聴いて、この子供達や被災地のスキーヤーがスキーを続けられるよう

に応援しなければと思った。スキーシーズンがはじまる前に、遠野市スキー協会では、スキー用具を集め、津波でスキー用具を失ったスキーヤーに届ける活動を行い、シーズンに入ってから無料スキー教室や、スポーツ少年団交流会などを開催した。一人でも多くの被災したスキーヤーが

公認パトロール検定を受験して

岩山スキー学校 及川 元(五一期)

「受検するんじゃないかなあ……」

これが養成講習会初日の私の正直な気持ちでした。「救急救急員は持っているし、検定会場も近くの蔵王だし、パトロールも興味あるなあ……」、昨年指導員に合格し、今年の目標がこれといって無かった私にとって、パトロール受検は格好の目標となったのでした。

しかし、現実はどう甘くはありません。少なからずスキー操作に自信があった私は「あの棒が付いたボートもなるとかなるべ」と高を括っていましたが、急斜面での真下切り換えでいきなり転覆。普段の運動不足もたたって腕もパンパン、握力も徐々に無くなっていきます。そして、午前十と午後のそれぞれ最後の一本は兎平からスキーセンターまでの全制動、夜は三角巾とロープの練習と、肉体的にも、精神的にも高校の部活以来の疲労感でヘトヘト、自信喪失、もう飲む気力も無く9時消灯



となりました。

人の命がかかっているからこそ、このような厳しい練習をしているのだと認識し、新たに気持ちを入れ替え練習するうちに、2回目の養成講習会の頃にはコツも解つてきて、なんとか形にすることができるようになりました。

検定本番、ちょうど蔵王ではW杯女子ジャンプ蔵王大大会が開催されており、理論検定会場の蔵王体育館にはプレスルームがあり、各国の選手や報道陣が沢山いるなか、国際的な雰囲気にも包まれながら、雪上種目は、高梨選手の日本人女子初の優勝を決めた

スキーをやめないで続けようという気持ちでいっぱいだった。「雪、スキー、感動」そんな言葉をいつまでも共に心に刻んで雪上で笑顔でいられる仲間を一人も失いたくないと思った。そしてこの活動は継続していくことが確認された。

大ジャンプの歓声が聞こえるジャンプ台の下でグレンデで行なわれました。アイスパーンの上に20センチ程の新雪が降り、決して良い状況ではありませんでしたが、綱張りの養成講習会に比べれば斜度もなく精神的には余裕を持って受検することができました。

閉会式での合格発表では、今回一緒に受検した中崎知哉さんの名前が5番目に呼ばれ、ほどこなく8番目には私の名前が呼ばれ、二人とも上位合格でき岩手県スキー連盟の面目をなんとか保つことができた。きホツとしたと同時に、何とも言えない達成感を覚えました。

最後になりましたが、養成講習会において丁寧にご指導頂きました竹田直彦さん、高畑伸也さん、練習グレンデの整備や受検にあたってのアドバースなど多岐に亘ってサポート頂きました綱張温泉スキー場パトロール隊の皆さん、検定直前に三角巾とロープを特訓頂きました盛岡市スキー協会安対部の本宮秀孝さん、遠藤正さん、本当にありがとうございました。

ここに頂戴した公認証には「人間愛に根ざしたボランティアの崇高な活動を目ざし厳しい技術の鍛練と高度な知識を習得された貴殿の前途に期待します」と記されており、さすが、恥ずかしながら私の技術の鍛練、知識の習得はまだまだこれからです。期待に応えるよう頑張りたいと思いますので、今後とも諸先輩方からのご指導、ご鞭撻の程よろしくお願いいたします。